平成28年度東北歴史博物館中長期目標達成自己評価

平成29年3月31日

東北歴史博物館は，入館者数の減少傾向への対応策として平成25年度を初年とする「東北歴史博物館中長期目標」を策定し，より魅力的な博物館の運営を目指して新たな活動に着手してきた。
重点目標としては，今年度も昨年度に引き続き，「こども利用促進に向けた取組の推進（こどもプロジェクト）」「東日本大震災対応」の2つを柱に据え，その実現のために中長期目標の中から関連する個別取組を重点事業と位置付け，目標達成推進委員会で各部門の進捗状況を確認しながら進めてきた。
「こども利用促進に向けた取組の推進（こどもプロジェクト）」は，小学生などの継続的な利用を促進するための仕組み作りと，学校教育との連携を強化することで学校団体利用の促進を図るため新たな取組を探るもの，「東日本大震災対応」については，館蔵資料のみならず県内全域の被災資料に目を向けその救出・保全活動を積極的に推進するとともに，過去の震災も含め震災と復興についての調査研究・資料収集に取り組み，その成果を総合展示室リニューアルに活かすことも視野に入れた活動を目指すものである。

目標達成に向けた取り組みの達成度を，平成28年12月1日現在を基準日として全職員で評価した中間評価や意見を基に，各部・各班において今年度を総括する内部評価（中間）を実施した。
評価結果は，以下のとおりであり，昨年度と比較して，12の項目で評価が上がり，12の項目で評価が下がっている。8項目は評価が同じであった。今年度は，中期目標4年目で全職員が目標達成に向け努力しているところではあるが，「3：ほぼ達成されている」が10項目と約3分の1に留まり，22項目が「3」に到達していない評価になっている。
評価結果を職員が共有し真摯に受け止めることで，成果の出せなかった項目は問題点を探り，高い成果を果たしたものでも見直しを怠らず，本目標が目指すものを再確認しながら次年度以降も館全体で議論を深め取り組んでいく。まずは，改善できるものから改善していくという意識を持ち，中長期目標を進行管理していく。
なお，評価に当たっては次の4段階の評価基準を設け評価を実施した。
評価基準　4：十分達成されている　3：ほぼ達成されている　2：やや不十分である　1：不十分である

1 常設展示・企画展示

特別展示は，昨年と同様，4万人台の観客動員を達成できた。 平成25年度以来，利用者数の伸びが堅調に維持できており，今年度においても”利用者に魅力的な特別展開催”という大きな課題を達成できたと考えられる。他機関等との連携を積極的に図ることで開催にこぎつけ，全体の観覧者増に結びつけることができた。次年度以降も，今年度から来年度にまたがる「世界遺産ラスコー」展のほか，「漢字三千年」展など大型巡回展の開催が予定されており，今後も観覧者増に向けた巡回展誘致活動を積極的に行っていく。
なお，総合展示室リニューアルに関しては，今年度は災害展示研究ワーキンググループ内での検討結果を踏まえ，リニューアル基本構想案を策定した。今後については，細部を詰めながら，リニューアル実現に向け作業を進めていく。

達成目標No.	評価視点	評価	実　績
1	総合展示室のリニューアルの方向性を明らかにできたか。	2.8	災害展示研究WGが中心となって各分野担当者も交えた検討会を実施し，歴史災害を盛り込んだリニューアル基本構想案を策定した。今後については，展示シナリオ，展示資料等，細部を詰めながら，主務課と協議し，予算獲得に向け作業を進めていく。リニューアル完成目標は平成36年度である。 キャプション・展示パネル等に関しては要改修箇所の更新を行い，より見やすい展示にすることができた。 補助事業を活用し，新たな展示図録を制作中である。より充実した情報を提供できるよう編集作業を進めており，来年度末に刊行予定である。
2	テーマ展示室の充実が図られたか。	3.1	今年度は新企画として「郷土玩具の世界－手島コレクション」（民俗）および「修復された被災文化財－小梁川・大梁川遺跡」（考古）の展示を行った。また，「高僧の墨跡」（歴史），「信仰の切り紙」（民俗）では新資料により再構成した展示を行った。 今後については，来館者の多彩なニーズに応え，さらに魅力あるテーマ展示とするために，新企画，新資料の展示を充実させ，展示期間等の見直しやWEBでの資料紹介も積極的に行っていく方針である。

3	利用者に魅力的な特別展が行われたか。	3.0	【特別展】 各展覧会の観覧者数については，「アンコール・ワットへのみち」展は27,676人，「日本人とクジラ」展は5,546人,「工芸継承」展は4,113人であった。また，来年度にまたがる「世界遺産ラスコー展」については3月25日に開幕し、年度末までに3,425人を動員した。 近年の特別展観覧者数は，平成25年度が23,369人,平成26年度が39,287人,平成27年度が48,403人と増加傾向にある。今年度は，目標を下回った展覧会もあったが，計40,760人を数え、昨年度と同様，4万人を超える観覧者数を記録した。 また，運営面としては，近年では最大規模となる「世界遺産ラスコー展」の開催にこぎつけた事に関しては特記したい。 [こどもプロジェクトの一環としての特別展] 特別展「工芸継承」では，高校生・大学生・若手工人によるワークショップと参加型展覧会の企画・運営を行った。特別展「世界遺産ラスコー展」では，関連イベントとして小学生を対象とした体験教室・ワークショップを開催した（下記6参照）。 [“こどもキャプション”の設置] 特別展開催時，一般の来館者向けに附される展示資料の解説キャプションのほかに，来館された子どもたちの興味や関心を高め，展示の理解を助けるための「こどもキャプション」を併せて設置した。その内容は，「資料のどの部分を見ると面白さが分かるかを示すもの」，「クイズ・問いかけにより資料の理解を促すもの」，「資料にまつわるエピソード」で，小学校低学年を対象に，大きな文字，やさしい表現，短い文章，親しみやすいデザインで作っている。 平成28年度は「日本人とクジラ」展において，「大きなクジラの　小さなヒトコト！」というタイトルを付けて各所に設置した。この「こどもキャプション」は，来館者アンケートなどから，対象とする小学生だけでは無く，一般の来館者からも展示の理解に役立つという意見が多数寄せられ，一定の効果が認められている。 [開館20周年記念企画] 平成31年度は当館開館20周年にあたることから，今年度から，各分野の若手職員主体による「20周年プロジェクトチーム」を立ち上げた。現在，企画部班長とともに展示及び関連行事の企画・立案にあたっている。 【企画展】 「大白隠展」(会期：4月16日～6月26日)を瑞巌寺，東園寺，満勝寺との共同企画として実行委員会を組織し開催した。本展は当館が展示の企画立案を行い，瑞巌寺，東園寺，満勝寺から展示資料や図録等の提供を受けて実施した展覧会である。常設展観覧者には無料で公開し，該期の常設展入館者は15,076人を数えた。有料入館者数での比較では，特別展「日本発掘」展（会期：5月31日～7月9日）を開催した平成26年度における該期の入館者5,062人(常設展+特別展)を上回る，5,868人の観覧者数を記録しており，入館者増に貢献した。
4	外部巡回展を積極的に誘致できたか。	3.6	マスコミ・プロモーター提案等による大型巡回展誘致を継続して積極的に図っている。来年度は，河北新報社・東日本放送との共同主催により「世界遺産ラスコー展～クロマニョン人が残した洞窟壁画～」展（企画制作：国立科学博物館・TBSテレビ・毎日新聞社）を今年度末の3月25日から5月28日まで開催し，その後，6月24日からは河北新報社・東日本放送との共同主催により「漢字三千年」展を開催予定である。 また，平成30年度については，巡回展ではないが，大規模特別展として多賀城市，河北新報社，仙台放送とのタイアップによる「東大寺展（仮）」の誘致を実現しており，それ以降の大規模展覧会の誘致・開催についても現在，多面的な働きかけを行っている最中である。

2　教育普及

本事業は参加者のニーズの把握に努めながら，これまで継続的に取り組んできたものである。№5における講座，体験教室等の各企画は昨年度と比して，より充実した内容で実施した。また，平成25年度からスタートした『こどもプロジェクト』に位置付け，今年度の重点課題として取り組んだ№6では，学校との連携を更に強化して事業を展開し，一定の成果をあげることができた。しかし，歴史教育における県の防災教育施設として整備した，こども歴史館「歴史と災害学びのシアター」については運営開始にこぎつけたものの，学校利用の観点では周知等に未だ課題を残しており今後，早急に対策を練り対応したい。

達成目標No.	評価視点	評価	実　績
5	県民のニーズや興味関心をつかみ、充実が図られたか。	2.9	【講座】 参加者から人気の高い館長講座を今年度は10回から15回に増やし，来館者ニーズに応えた。また、れきはく講座，古文書講座入門編・中級編，史料講読講座，民俗芸能講座，体験考古学講座についても継続して実施し，特に古文書講座，史料講読講座では40名以上の応募があり，好評を得ている。 【体験教室】 ・親しみやすく参加したくなるような教室を展開するため「けずりひを作ろう」「鳥ワナを作ろう」など新規教室を実施した。「けずりひ」では氷を削るいくつかのアイテム（時代毎）での体験により，参加者に道具の進歩を体感してもらうことができた。 【体験イベント】 ・体験イベントの登録者について，春は986名，秋は432名を記録した。 ・体験イベントのチラシについて，体験プログラムの内容がわかりやすいイラストを採用した。 ・秋のイベントでは毎回混雑していたプログラムの受付方法を変更し，参加者のストレス軽減・満足度向上を図った。 ・イベントにむすび丸を呼び，来館者の満足度向上を図った。 ・雨天時のプログラム内容・会場の変更案を事前に作成・館内で共有し，スムーズな対応を可能とした。 【多賀城めぐり】 今年度はハイキング形式の番外編も含め13回開催し、計165名の参加があった。特に気候的に館外活動の適期である9月は20名以上の参加者を数え好評であった。 【その他】 県内外の各種団体，施設等からの要望に積極的に応じ，歴史等に関する講座，講演，体験教室を館内外で実施した。
6 （重点）	学校の利用に対する学習支援の充実が図られたか。	3.0	【学習支援】 《民話出張授業》 ・多賀城民話の会の協力を得て，小学校6校14クラス(約380人)を対象に民話授業を実施した。 ・学校と民話の会の連携強化を企図し，募集を近隣市町(多賀城，利府，七ヶ浜，塩竈)に絞った。 ・地域の民話や言い伝えを取り上げることが可能で，学校側からも概ね好評価を得た。 ・募集数を超える申込みがあり，断らざるを得なかった利府町立の2校については利府民話の会に情報提供を行って直接学校に出向いていただいた。 《その他出張授業》 ・仙台第一高等学校SSH合同巡検ガイダンス(1学年320名) ・仙台第一高等学校理系日本史・博学連携授業(2学年80名) ・黒川高等学校修学旅行事前学習（2学年73名） ・白百合学園小学校「むかしのくらし」学習（3学年39名） 《館内授業》（展示解説除く） ・高崎中学校地域学習(180名) ・中学校社会科研修会（県内社会科教員15名） ・古川工業高等学校「カマ神」学習（3学年15名） 《体験授業》 ・本年度は1校から依頼があり，約60人を対象とした体験授業（勾玉作り）を行った。また，地区児童会（来館者）を対象とした体験教室（勾玉作り）を1回実施した。 ・「世界遺産ラスコー展」プレイベントとして，当館と塩竈市杉村惇美術館を会場に，多賀城市城南小学校4年生，塩釜市各小学校5年生の計8校で洞窟壁画体験教室を実施し，先史時代の絵画の技法と歴史についての学びを提供した。（参加者：児童410名，教員23名） 《学習シート改訂》 総合展示室たんけんカードの新作を制作して入れ替えし，リピーターに対応した。また，テーマ展示の内容に合わせてテーマ展示室クイズシートの改訂を行った。特別展「アンコールワットへのみち」において，小学生が神像，仏像を楽しく学べるように展示室クイズシートを作成し好評を得た。 《職場体験》 学校からの依頼に応じ，中学校4校，高校1校の職場体験を実施した。実施にあたっては従来より，見学や解説の時間を減らし，体験活動を中心に内容・日程を組み立てたが，各分野の学芸職員の協力を得て，学芸員業務の体験活動を充実させることができた。 【こども歴史館リニューアル】 昨年度予算でインタラクティブシアターの新コンテンツの作成とシアターの上映システムを更新し，本年度から運用開始した。これまでの歴史系コンテンツに加え，防災コンテンツが増えたことでより充実した上映内容になり，防災教育の中でも活用できる場となった。また，システムの更新により故障等が激減し，円滑な運営が可能となった。

3 調査研究

研究テーマ・目的の明確化は昨年と同じ，博物館学的研究の推進はやや低下という結果になった。自由意見にも，前者については成果が見えない，後者については展示や教育普及の研究を推進する体制整備が必要という意見があった。各研究分野では，テーマを吟味し，成果を研究紀要，展示，各種講座，報告書，学術誌，学会発表など様々な形で公開に努めているが，さらに努力する。博物館学的研究の推進については，全員に共通するテーマについて（今回は資料保存環境）の勉強会の開催，分野横断的な研究としては歴史的災害展示研究を継続中であるが，参加体制も含め運営方法を検討していく。

一方，外部資金の獲得については，昨年度はじめて申請が可能になった科学研究費が4件中2件採択されたのは大きな成果と考えている。今後さらに採択率向上を目指し，研究の質の向上，申請戦略検討を推進していく。

達成目標No.	評価視点	評価	実　績
7	研究テーマと目的を明確にし、評価体制を整えているか。	2.7	各研究分野ごとに調査研究・成果公開の予定を明確にした事業計画を策定し，年度当初の館員会議，学芸会議で提示し館員間で共有している。必要に応じて随時，成果と課題について議論・総括し，次年度の研究計画に反映させている。
8	博物館学的研究を推進しているか。	2.6	歴史民俗資料館等専門職員研修，博物館・美術館保存担当学芸員研修等に職員を派遣した。 資料の取扱い，保存・管理の基本的事項について，館員間で情報共有することを目的に報告・勉強会を実施した。
9	外部資金を獲得し、他機関との共同調査・研究を進めているか。	3.2	・科学研究費（独立行政法人日本学術振興会） ①基盤C「文化財収蔵のための緊急時における非文化財収蔵施設の活用調査と低コスト運営法の開発」 ②挑戦萌芽「砂押川・七北田川における現生汽水生種・海生種珪藻の遡上限界」 の2件が採択された。 新たに2件（基盤C「東日本大震災を契機とする歴史災害展示の構築に係る研究」，挑戦開拓「地域社会と文化財保全を協働する地域博物館の機能の顕在化にかかる実証的研究」）応募している。 ・文化遺産を活かした地域活性化事業（文化庁） ①地域に伝わる御正体を中心とした古代中世文化遺産と関連文化遺産の調査・活用事業 ②身近な文化遺産を通した地域再発見事業 ③宮城県の地域文化財に関わる調査・活用事業 ④仙台藩大肝煎吉田家古文書に関わる整理・活用事業 ・地域の核となる美術館博物館支援事業（みやぎ歴史博物館「こどもプロジェクト」地域共働事業）（文化庁） ①動物に関わる東北地方における民俗文化財を伝承するプログラム構築事業 ②洞窟壁画を学び・描くアウトリーチ活動事業 ③こども参加型展示構築モデル化事業 ・被災ミュージアム再興事業(被災資料修理事業)（文化庁） が採択された。 国や地方自治体をはじめとする公共機関，県内外の博物館・美術館，大学，民間等多くの外部機関と連携して活動を推進している。 ・企画展「大白隠展」(瑞巌寺，東園寺，満勝寺) ・特別展「工芸継承」(仙台箪笥協同組合) ・出張授業&ワークショップ「洞窟壁画を学び・描くアウトリーチ活動事業」(塩竈市杉村惇美術館) ・調査&ワークショップ「動物に関わる東北地方における民俗文化財を伝承するプログラム構築事業」(みやぎ民話の会) ・「民話を聞く会」(利府民話の会・多賀城民話の会)

4 資料の収集・保管・活用

資料収集と保管スペースの確保が昨年より低い評価だった。資料収集については寄附・寄託に依存している状態が続いており，購入財源の獲得が依然として課題である。引き続き主務課との協議を推進したい。保存スペースの確保については，浮島収蔵庫について，昨年度までに大規模な不要物の廃棄，除湿設備の導入で当面必要な空間は確保している。しかし，新築・改築などの抜本的な対策については進展しておらず，これについても引き続き主務課への働きかけを続けていく。
資料の公開もさらに推進する。

達成目標No.	評価視点	評価	実 績
10	各分野ごとの資料収集計画を再構築し、計画的な収集ができたか。	2.4	収集は適宜計画見直しを行い，策定された計画に基づいて資料調査・情報収集を展開した。今年度は民俗資料（ツォーベル家資料：民俗芸能関係記録資料325点），歴史資料（畠山家資料：リードオルガン等291点，齋藤家資料：マッチラベル等5062点），文書資料（畠山家資料：仕入れ帳等979点）などを収集している(手続き中を含む)。 自己評価が低かった理由の一つとしては，より計画的な収集を実現するための資料購入財源が確保できていないことがあると考える。その財源として，県の美術品購入基金の活用について協議中である。
11	あらたな収蔵施設・スペースの確保・拡充が行われたか。	2.4	平成27年度までに，文化庁等の補助金を活用しながら浮島収蔵庫の大規模な環境整備を実施して，保管空間を大幅に確保するとともに，除湿排水ドレンや大型除湿器の設置など設備も導入し，保存環境向上を実現した。今年度はそれらが一段落し，新たな空間を確保できなかったのが，低い評価になった理由の一つと考えている。 また，同収蔵庫の新築・改築を含めた抜本的な対応策について，引き続き主務課と協議を継続していく。 新たに施設が整備されるまでの間，一層の環境改善を行い，収蔵場所の確保に努める。その一環として，安価で容易に行える収蔵空間構築法について，平成28年度科研費を取得し研究を進めている。
12	収蔵資料のデータベースの充実と収蔵資料の公開を推進したか。	2.9	登録作業を推進し，実物資料(考古分野など4,388件)，画像資料(118件)，図書資料(1,429件)等を新規登録した。資料目録をホームページ上で新たに国分家文書資料など250件を公開した。

5 情報の発信

広報については，これまでと同様に広報先，広報手段等を検討して効率的な情報発信となるよう努めた。また，宣伝効果の大きいマスコミへの情報提供のほか，近隣市町との連携・協力を行い，きめ細かな広報活動を行った。今後も，このような取り組みを継続して，当館の活動を広く周知していく。

達成目標No.	評価視点	評価	実 績
13	分かりやすいアクセス情報の提供が図られているか。	2.8	昨年3月に開通した多賀城ICについては，チラシやポスター，ホームページ等にその情報を反映させた。また，特別展開催期間は多賀城市と塩釜警察署の許可を得て，市内に案内表示を設置した。
14	多賀城市や近隣市町の観光行政や教育機関及び民間企業等と連携強化が図られたか。	2.8	近隣市町（多賀城市，塩竈市，七ヶ浜町，利府町，松島町）へ当館催事情報等の掲載依頼を定期的，継続的に行った。 多賀城市主催の「あやめ祭り」を後援したほか，多賀城市教育委員会主催の多賀城跡の保存と研究の歴史等を紹介したパネル展示を開催した。 また，「史都多賀城万葉まつり」に共催として企画段階から関わり，運営及び当日の進行にも幅広く協力した。来場者に当館の展示や催事について知ってもらえるようポスター・チラシ等の掲示により広報を行った。
15	館のロゴの検討は十分になされたか。	2.0	他県を含めた他館の先行事例の情報を集めるとともに，東北地方の基幹的な歴史系博物館としてどのようなロゴがふさわしいか，制定後の利活用と併せて，その制定方法，スケジュール等について検討した。なお，スケジュールについては館20周年となる平成31年度での制定化も案の一つとして検討を重ねた。

16 （重点）	広報手段・方法の見直しにより効果的な広報に努めているか。	2.9	各種発送業務を検討し，内容毎に発送先や部数，発送方法等を精査した。また，仕分け作業の効率化，県庁及び教育事務所の区分箱の活用，宅配便及びレターパックの活用等，効果的・効率的に広報ができるよう工夫した。 特別展については，通常の広報に加え昨年同様展示の区分毎にメインとなる客層に直接アピールする広報を工夫した。また，県教育委員会のホームページ上でも広報を行い，多くの人の目に触れるようにした。 テーマ展示や催事等の広報についても，通常の手段に加え展示資料に縁のある市町村広報担当者へ直接情報提供を行った。 学校等の利用希望団体を対象に「東北歴史博物館利用説明会」を実施した。また，県教委主催の研修会において，小・中・特別支援学校教員に対し，当館の利用方法等について説明を行った。 コボスタの大型ビジョンでの動画CMを継続した。 県主催の広報研修会に昨年に引き続き参加し，報道機関の立場からみた情報提供のポイント等を実際の業務の参考とした。
17	他館と連携した広報や館内掲示物の充実に努めているか。	2.8	宮城県美術館と連携して催事情報提供を行っており，今後も継続していく。 宮城県図書館では当館の催事に関するコーナーを設置しているので，当館からも積極的に情報提供を行っている。 また，昨年に引き続き，宮城県公文書館による企画展（パネル展示）を1ヶ月間開催したほか，第二管区海上保安本部主催による灯台の歴史などを紹介するパネル展示等も行った。 館内掲示については来館者に分かりやすく，目に留まるよう適宜工夫して設置している。
18	ホームページの充実が図られ、活用度の高い魅力的なものとなっているか。	2.6	展示や催事，館からのお知らせ等，できる限りきめ細かな情報掲載に努めた。展示については，画像を多く取り入れ視覚的に分かりやすいものになるよう心がけた。
19	WEBや電子メールを活用し事業の促進が図られたか。	2.8	情報担当課と協議して，来館者の利便性を考慮しwifiを導入した。

6 県民参加

これまで同様，特別展の際にアンケートを実施して観覧者の要望を収集し，即対応できるものについては迅速に対応するよう心がけた。
また，ボランティアの方々による今野家住宅や体験イベントの運営等への協力や，友の会の活発な活動などもあり，当館の活動等に対する県民参加は進んでいると考えられる。これらの活動に併せて，今後大学等による利用促進を図っていく。
さらに，友の会企画に助言や支援ができるよう，一層の調査研究に努めていく。

達成目標No.	評価視点	評価	実 績
20	来館者のニーズ把握をしているか。	2.7	特別展アンケートの回収率を上げるため昨年度から実施した次回特別展招待券プレゼント(抽選)の特典付加を継続実施した。 学校団体（小・中学校）へのアンケートを継続し，感想や要望等の分析結果を職員や解説員と共有した。
21	来館者のニーズ分析による対応がなされているか。	2.8	アンケート等によせられた要望については，展示担当に情報提供を行い，展示期間中に対応可能なものは対応し，不可能なものは次回以降の展示に反映できるようにした。
22	館内ボランティア業務の見直しを図り、ボランティア活動を推進しているか。	3.0	博物館ボランティアメンバーに対し，業務に対する考え方や希望業務などの聞き取りを行った。現状は今野家住宅の管理・解説対応が主たる業務となっており，メンバーの多くも「今野家で活動するボランティア」という認識が強かった。一方で，博物館内での業務（資料整理など）に興味・関心を持つメンバーもおり，引き続きボランティアの意識調査を継続するとともに，司書業務等のボランティア制導入に向け検討・整備を進めていく。 大学生ボランティアについては，年3回の博物館体験イベントにおいて学生ボランティアを募集し,99名が登録（昨年比28名増），春と秋2回のイベントで計58名の協力を得た。登録が増えた要因としては，学生ボランティア登録説明会を，これまでの宮城学院女子大学に加え，東北学院大学でも実施したことや，これまでは年度ごとに新規登録としていたところを，昨年度からの継続登録者を募ったことなどが主な要因と考えられる。
23	友の会の充実のため育成支援に取り組んでいるか。	3.2	友の会の各種企画(歴史講座，歴史探訪会，体験教室，映画上映会，バックヤードツアーなど)の立案に助言し，実施においては連絡調整や進行，企画によっては講師としてなど，様々な形で支援・協力している。 会員数は604　昨年比72会員増
24	大学等学校単位の利用促進が図られているか。	2.4	実施に向けた手続きの検討をしていたところ，今年度途中に平成29年度から展示の観覧料金値上げを求める動きがあり，制度設計の根本から修正を迫られることとなった。観覧料金の値上げについては，2月議会に提案されることから制度設計を修正し直し，関係各所への説明等内部手続きを進める。その後制度の運用に向けて県内大学等を中心に制度の周知を図っていく。

7 施設の整備・管理

開館から17年が経過し，老朽化による施設設備の不具合が多数発生し，その対処が課題となってることから，館内施設設備整備検討委員会において不具合箇所の現状を共有するとともに，予算要求に向けた検討を行い，施設改修に係るローリングを行い年次改修計画の見直しを行った。

当該計画に基づいた予算措置により徐々に施設の改修・充実が進んできており，今後も継続的に改修費を盛り込んだ予算編成を行うことで，施設の更新と維持管理に努めていく。

達成目標No.	評価視点	評価	実 績
25	施設整備計画を策定し、計画的な改善が図られているか。	2.9	館の環境整備として「自動火災報知器更新工事」，「ガス焚きボイラー更新工事」，「空気調和機配管等改修工事」を営繕課へ執行委任し施行に向け入札等の事務手続き中である（繰越事業となる見込み）。また，「非常照明・誘導灯改修工事」，「冷温水発生機等オーバーホール」の設計についても営繕課に執行委任した。 施設設備検討委員会（館内）において，館施設設備の要改修箇所の確認及び予算要求に向けた検討を行い，施設改修に係る基準及び今後の改修整備の年次計画を策定した。当該計画は，毎年度検証するとともに所要額を各年度の当初予算要求に反映させることとしている。 引き続き施設設備の状況把握に努めていく。
26	博物館資料の保管環境維持に努めているか。	3.1	資料保存環境の維持を図るため，年次計画に基づき「ガス炊きボイラー更新工事」，「空気調和機配管等改修工事」を営繕課に執行委任して施工に向け手続き中である。また，「冷温水発生機等オーバーホール」の設計についても営繕課へ執行委任し進行中である。 引き続き設備等保守管理委託業者と連携し空調等の館内環境関係機器の維持保全に努めていく。
27	障害者に適切な対応ができるためのスキルが整っているか。	3.0	車いすを利用するお客様に対して，情報サービス班・インフォメーション・防災センターと連携し，迅速且つスムーズに入館できる体制整備に努めた。 障害者差別解消法に基づき障害をもった来館者へ適切な対応が行えるよう，宮城県の対応要領・指針に係る職員向け研修会を開催し啓発を図った。
28	障害者対応施設・設備の整備は十分か。	2.9	障害者用呼び出しインターフォンの定期的な確認を行うとともに，今後も来館者等の意見を踏まえ，障害者が安心して利用できる環境を整備していく。

8 組織・人員

東北歴史博物館中長期目標が達成ができる組織を目指し，諸課題を検討し改善を図ってきているが，更なる効果的・効率的な業務運営ができる環境づくりに努めていく。

達成目標No.	評価視点	評価	実 績
29	現状の組織運営の検証はなされているか。	2.4	博物館業務については，正規職員のほか臨時職員，パート職員などで対応しているが，外部資金による事業拡大や震災対応による職員減などから正規職員の負担が増している。 こうした館業務の諸課題については，部・班長会議での情報交換や中長期目標達成推進委員会での目標達成進捗状況の確認を行い改善に努めている。

9 東日本大震災対応

被災資料の保全については，宮城県被災文化財等保全連絡会議が所期一定の役割を終え解散することになった。代表幹事館・事務局として，今後の災害に備えることも念頭に，これまでの活動の総括を行っている。また県内の残存案件を把握し，それらについては県立博物館として支援を継続して行く。

災害に関係する展示については，常設展リニューアルに向けて構成案を提示できたのは大きな成果と考えている。今後，研究費を獲得し，具体化のために，調査研究を推進していく。

達成目標No.	評価視点	評価	実　績
30（重点）	他機関との連携協働を図り、被災資料の救出・保全・修理を推進し，情報公開に努めているか。	3.4	県内の被災文化財・資料のクリーニング・安定化処置，保管施設の環境調査・管理支援，資料の活用支援などを継続して実施している（南三陸町，石巻市，多賀城市，亘理町等）。 また宮城県被災文化財等保全連絡会議代表幹事・事務局として，会議の運営及び今年度末に解散予定であることから，総括業務・企画（報告書刊行，公開シンポジウム開催）を実施している。
31	展示は、震災から立ち上がろうとする県民の活力増進の一助となっているか。	2.9	復興祈念企画展「大白隠展」，テーマ展「修復された被災文化財ー小梁川・大梁川遺跡ー」を開催した。
32	調査研究を行い、展示や映像として公開への取組は行われているか。	2.9	平成26年度から「歴史的災害展示研究」として分野横断的に取り組んでいる。昨年度に引き続き3回の研究会を開催し，常設展リニューアルを前提として，展示構成案を作成した。 また研究費獲得に向け，科研費（基盤C「東日本大震災を契機とする歴史災害展示の構築に係る研究」）を申請している。

総合評価

	評価	意見・提言
総合評価	2.7	全職員目標達成に向けて日々努力し取り組んだ結果，改善に結びつき評価が大幅に向上した項目がある一方，下がった項目もあった。評価が前年度から下がった項目は20項目から12項目に減じている。さらに評価1点台の項目はH27の2項目から0項目になっている。しかしながら全体評価では0．1ポイント下がった結果となった。 この評価結果を真摯に受け止め，次年度は中期計画最終年度であるので，更なる積極的な取組を行い，目標達成に向け事業運営に努めていく。